

■ 幼年学校

「むう……」

呻きとも唸りともつかない声は、隣の席に座を占めている赤毛の少年の耳にだけ届いた。

「ラインハルトさま？」

周囲に素早く目をやって、誰の視線も彼らに注がれていないのを確認すると、ジークフリード・キルヒアイスは、ポケットにしのばせていた黒パンをそつと隣席に滑らせた。

「……ダンケ」

初夏の日差しが水晶を透過して閃くような微笑が応えた。人類社会の中で……などという発想は、まだこの時のキルヒアイスにはない。この幼年学校生徒たちの中で唯一、彼にだけ向けられる笑顔は、滲み入った胸の裡を心地よく暖めてくれる。

視界の端で、大皿をキルヒアイスの前のそれに移し替える。煌めくような黄金の光を帯びた動きが、風のように早かった。

瞬時に大盛り状態になった大皿の中身に、キルヒアイスはスプーンを手にした手の動きを速めた。一五歳の健康な少年の食欲が、みるみる皿の中身を減らしていくのに、こちらは黒パンをちぎって口に運んでいる黄金色の髪の少年は、感嘆と嫌悪を相半ばする視線を向けていた。

「よくそんなに素早く食べられるな……！」

「美味しいですよ、自宅でも週に一回は、夕食にこれが出ましたから」
「姉上は絶対にこんな料理は出さなかったぞ。こんな……」

「熱くて辛くて、全然甘みも何にもない料理なんて……ですか？」

もう何度目のやりとりになるのかも思い出せない。後には続くはずの台詞を先回りしてかつさらい、口元を紙ナプキンで拭うと、キルヒアイスは小さく微笑って、目の前の料理に視線を落とした。

ゲニコンステーター・ライス

湯気を立てる 飯 米 の白い丘の表面の半ばを覆った、香ばしい

香りを立てる黄褐色のソース。本来なら、煮込まれているはずの肉やジャガイモの塊はほとんどなく、あっても破片程度だったが、帝国の一般的平民家庭に育ったキルヒアイスにとつては、ありふれた食事だった。そう、彼らの前だけでなく、広い食堂の中、思い思いのテーブルに席を占めた幼年学校生徒たちの前に供されているのは、いわゆる『カレーライス』だった。

その昔の地球時代、大洋を戦場とした軍隊、いわゆる海軍では一定周期でカレー料理を供して、海上で狂いがちな日時感覚の補正を図ったという。その真似でもあるまいが、ジークフリード・キルヒアイスと彼の金髪の親友が通う帝国軍幼年学校では、定期的にカレーライスが夕食のメニューを占めることになっていた。

「もう少し、肉を入れてくれると嬉しいんですけどね」

確かに、自宅で母が作ってくれたものに比べると、油っぽくて舌に絡みつく辛みが強いばかりの味だったが、それでも口にできないほどひどい代物ではない。安い食堂で、普通に出てくるレベルだ、とキルヒアイ

スは思う。

「……」

金髪の少年は、信じられないほどに整った美貌に似合わぬ、ぶんむくれた表情を浮かべたまま黒パンをかじり続ける。そうした姿であつてさえも、造化の奇跡を思わせる端麗さは少しも損なわれていない。

そう、一〇歳のあの日からジークフリード・キルヒアイスにとって親友以上の存在、その半身とも言うべき、この少年……ラインハルト・フォン・ミューゼルは、カレー料理が苦手だったのだ。

姉であり、ミューゼル家の家庭内政の責任を一身に負っていたアンネローゼは、そんな弟の嗜好を熟知していたのかも知れない。自宅での食事では、スパイスの効いた食事は作らなかつたようだった。あるいは、弟がもう少し年齢を重ねたところで、少しずつ、その味覚に香辛料をなじませていくつもりだったのかも、とキルヒアイスは思うのだ。

だが、そのアンネローゼは既に弟の食事を管理できる立場から拉し去られ、遠く新無憂宮の西苑に、皇帝の寵姫としての身を置く存在

ノイエ・サンスーシ
ヴェスト・ガルテン

となつてしまつてゐる。

最初が最悪だつた。

「なんだ、これは……？」

幼年学校の食堂で始めてカレーライスを目にした一〇歳のラインハルトは、それを毛嫌いするどころか、好奇心一杯に料理を見つめていたものだ。

熱くて辛いから、氣をつけて食べるんだよ……とキルヒアイスが忠告の一言を放つた時には遅かつた。

好奇心と食欲の赴くままに、米とカレーソースを口一杯に頬張つた瞬間だつた。

「……………!!……………!!」

ラインハルトの表情が一変した。

頬張つた食物を辺り一面に吹き散らすなどと言う無様なことだけは、プライドにかけて必死にこらえたラインハルトだったが、それも、異変

に気付いたキルヒアイスが慌てて食堂から彼を連れ出していなかったら、どうなっていたか分からない。

他の生徒……鵜の目鷹の目で、ラインハルトの粗あらを探し続けているような貴族出身に、その後の幼年学校生活を通じて誹謗と侮辱のネタを提供する醜態は免れたが、しばらくの間、さすがのラインハルトも些か消沈した様子だった。勿論、そんな姿を目にしたのはキルヒアイスだけだった。

「あれは一体何なんだ、あんな辛いものを人間が食べられるものなのか。その上に、どうしてあんなに熱いんだ」

この時、ラインハルトは口蓋粘膜の一部をやけどしてしまい、『熱いんだ』であるべき発音も『ろうひてあんらにあふいんら』となってしまうていたほどだった。

以来、ラインハルトにとって、カレー料理、なかんずく就中カレーライスはチェシャに続く食卓での仇敵となったのである。



とは言え、週に一度とは言わぬまでも二週に一度は食卓に供される、この料理に対して、ラインハルトは、まだ攻略の糸口すら見いだせていないのだ。

「まだ、良いと思って下さい」

育ち盛りの少年達向けに、量だけはたっぷりと用意されたサイドメニュー……サラダ、山盛りのポテトとザワークラウト……を口に運びながら、キルヒアイスはさらに苦笑する。

「これで一緒にチェシヤのサラダでも出てきたらどうするんです」
「嫌なことを言うな」

さすがにサラダは黙々と口に運んでいた金髪の少年は、描いたように形の良い眉を、鋭角に歪ませた。

「チェシヤにしても、このカレーってやつにしても、なんでこんなものが……」

「でも、軍人になったら、チエシヤもカレーも普通に出てくるかも知れ
ませんよ。嫌いだから食べないでは済まないと思いますけど」

「……」

俺が軍の頂点に立つたら、カレーとチエシヤを食事に出すことを禁じ
てやる……普通ならそんな言葉が返ってくるところだが、金髪の少年の
反応は違っていた。

「……そう……だな。何とかしなきゃならないことは分かってる」

黒パンの最後の一口を飲み込み、サラダを平らげて、ラインハルトは
ちよつと情けなさそうな顔になった。

「いつまでもお前に頼ってばかりもいられないしな」

「いえ、ラインハルトさまのお役に立てるなら……」

厨房からパンをくすねてくるくらい、なんでもありません。その言葉
はさすがに咽喉の奥に押し込むことにした。

ただ、そうでなくとも圭角の立ちすぎるラインハルトである。食事抜
きの処罰を受けることもしばしばで、そうしたときのための食糧を密か

に確保しておくのは、キルヒアイスにとっての神聖な義務の一つだったのだ。

「……この話はもうやめよう」

「ええ……ところで、次の週末のことですが……」

「最終検定のことか？」

両目が蒼氷色の刃の光を帯びた。

彼ら二人が幼年学校の通常教程以外、主に士官学校での幾つかの課程を履修していることは、過去にも何度か触れてきた。このところ、彼らが睡眠時間をも削って取り組んでいるのが、地上車運転技術と、初級車両整備資格である。

「いずれ、戦場に出たところで周囲は敵ばかりだろう。いざというときに車も動かせないし、故障した車両を修理もできないのでは、身を守るどころじゃない」

それがラインハルトの意見であり、キルヒアイスが全面的に同意するところだった。

後者は既に履修を終えて最終試験も受験、ラインハルトなどは自信満々で『あんなもの、合格できない方がおかしい』などと豪語している。キルヒアイスの方は、『確実にできたのは五割、どっちか分からないのは三割、あと二割はダメ』というところで、合格の確率は五分五分というところだろう。

一方、前者である。

こちらは実技教程がほぼ終わり、あとは路上での実技検定が残っている状態だった。

この検定に合格し、地上車運転資格が与えられたとしても、一八歳になるまで、一般道での運転資格は凍結される。ただし、戦場ではこの限りではない。

「部屋で話しましょう。ここは耳が多すぎます」

周囲のテーブルで、何人かがちらちらと自分たちに視線を走らせている様子が、キルヒアイスの脳裏に小さく警告灯を点滅させた。

ラインハルトが頷くのを確認し、キルヒアイスは食事のピッチを更に

上げた。

★☆☆★

「……こんなに走るのか？」

表示された地図の上に、白くうねうねとした曲線が描かれている。起点は士官学校ではなく、帝都から南西方面へ大きく離れた丘陵地帯の一角、帝国陸戦隊のフュッセン駐屯地がある。

フュッセン駐屯地を出て、さらに南西方向へ向かう。その後、逆時計回りに大きく円を描いて、南側から駐屯地へ戻ってくるコースである。

「楽に一〇〇キロ余り、ありますね」

普通の地上車運転資格試験ではあり得ない距離だが、戦地では、まったく初めての地域で、初年兵が何百キロも移動しなければならない事態も生じる……そんな説明を、ラインハルトは胡散臭げに見つめていた。

「それに……」

キルヒアイスの指がコースの一点を指して止まる。遠くフロイデン山

系の山稜から南東に長く伸びた山稜、その末端をなす山岳地帯である。白いラインは山岳地帯の中を縫うようにして複雑な曲線を描いて延びていた。

「こんな距離を、正規の資格も持たない人間に走らせて問題はないのか？」

「大半は、陸戦隊専用の訓練道路ですから、一般の車両はほとんど入ってきません。ただ……」

キルヒアイスの指先が少し動く。幹線道路が途切れ、一〇キロ近くにわたって一般道が続く。周囲一帯がホーエンフツセンという名の集落であり、集落に接して何らかの施設らしい、かなり広大な敷地を持った建物の所在が記されている。

ビオロギーシエ・フォルシユングスゲマインシャフト

「生物学 研究 共同体の研究施設。研究内容は……開示されていません」

『アルブレヒツベルガー研究開発センター』なる名称が表示されたが、それ以上にラインハルトの興味を惹くことはなかった。むしろ、訝しき

にラインハルトが眉を動かしたのは経路だった。ホーエンフュツセン集落の中央にある帝国政府地方監察局支所で通過の確認を受けることになってるが、そこまでの経路が、わざとのように入り組んだ、複雑極まる図形を描いているのだ。

「ここは、一般道じゃないか？」

「交通管制システムでコントロールするのだそうです」

検定車が走るコースでは、一時的に他の車両の進入を禁止し、万一の事故に備える。士官学校での車両運転検定では毎度のことであり、それも山中の、一〇キロ強程度の距離に過ぎない。周辺の集落や施設に通じる他の道もあり、交通の停滞や途絶でクレームが出るということもない。それに、検定中止や事故の際の受験者収容のため、上空には常時ジェツトヘリが待機することになっている。

「それは分かったが、なぜ、わざわざ、一般道を通らせるんだ？」

「軍専用道路だけでは能力の見定めにならないから……ではありませんか」

「ナビは使用を禁止されているのか？」

「それはありません。使って良いことになっています……というか、ナビ経由で検定車の動きを監視するからですから、ナビを切る方が禁止されています」

「一般道路を走らせる技術を見るというなら、ナビを使わせないようにするべきじゃないのか……」

「それは、そうですが……過去の検定もすべて、このやり方で実施されているそうですから」

「……」

なお納得いかなげにしばらくコースを睨み付けていたラインハルトだったが、やがて諦めたように視線を地図から外した。

「やめだ。色々考えていてもしょうがない。もし、これが罠だったとして……」

『罠』の一言が、キルヒアイスの眉も曇らせた。丸五年近い幼年学校生活。その間、偶然と思われぬような奇禍に出会い、危うく生命を落と

しかけた記憶が蘇ってきたのだ。それも一度や二度ではない。

「一度、二度なら偶然とも言えるが、三度なるとそうじゃないし、四度目、五度目があるとすれば誰かが俺たちを狙っていると言うことだ」

ラインハルトの分析とも言えぬ分析は、キルヒアイスにとつても異論を差し挟みようもないものだった。

「大貴族の連中に俺たちが危険だなどに見抜けるような切れる連中はいない……まだ、な」

言い止し、不快そうにラインハルトが飲み込んだ言葉を、キルヒアイスは正確に察することができた。彼らに危険性を見出すとすれば、それはまだ軍事・政治の世界においてはではない。とすれば、残るのは……アンネローゼが黄金の鳥かごの虜囚たるを強いられている場所。新無憂宮

ヴェスト・ガルテン

の西苑。貴婦人の皮を被った魔女たちが、アンネローゼに嫉視の眼差しを向けつつ、彼女にとって唯一の係累であり、未来の後援者ともなり得る彼らの身边に絹の手袋につつまれた毒手を伸ばしつつある。愉快

さとはおよそ縁のない想像に、二人は顔を見合わせた。

「武器の携帯は許されない、な？」

「無論です」

士官学校の課程で射撃の訓練は受けていて、二人ともトップに近い成績は上げている。だが、彼らの身分は幼年学校生徒でしかない。日常での武装が許されるはずもないのだ。

頷き、ラインハルトは視線を転じた。作り付けのライティング・デスクの抽斗から、その中に収まっている小さな箱を取り出した。

最高級の象牙を、名人が精魂を込めて彫り上げたような手が伸びて、

その先にダーツの矢ダートを拾い上げるのが、キルヒアイスの視界に映った。

繊細な外見に反して強靱な手首が閃き、空を切り裂いて飛んだ矢がダート的の中央に突き立って、小さく震える。

幼年学校に入るにあたってラインハルトが自宅から持ち込んだものはほとんど何もないと言っている。唯一に近い例外が、このダーツのセツ

トだった。と言つて、ラインハルトがゲームに長じているわけでもないのだ。

確かに矢の投擲は実に正確で、ほとんど狙ったとおりのエリアに的中させることができるし、通常のゲームの倍近い距離であつても、ラインハルトの手から放たれた矢は、見事に的の中央を穿つてキルヒアイスを感じさせた。

「凄いな、どんな風にやれば良いんだい？ ルールは？」

問うたキルヒアイスに、しかし、ラインハルトは肩を竦めるだけだった。

「これってゲームだったのか……ルール？ ルールなんてあるのか？ 知らないな」

ラインハルトの両親のどちらかの所持品……おそらくは母親の遺品なのではないか。キルヒアイスはそう思っている。ラインハルトが父親の所持品を身近におくはずもないし、ましてや、それを使ってみようなどと思うはずもなかったから。

「キルヒアイス……」

数度にわたって、小さな矢の軌跡で自身と的との間の空間を切り裂いたあと、ラインハルトが視線を転じたとき、キルヒアイスは既に彼の意図を察していた。

「ええ」

頷いたときには、既にその長身が椅子を蹴るようにしてたち上がっている。『敵』が『罫』という響応を用意してくれているというのであれば、こちらもそれなりのドレスコードを遵守すべきというものだろう。素早く書き出したリストを脳裏に思い浮かべ、キルヒアイスは部屋を後にする。後に続いたドアの開閉音は、ラインハルトがすべてをキルヒアイス一人に頼り切るつもりなど毛頭ないことを示していた。ラインハルトは言うだろう。これは俺たちの戦いなのだ……と。

■ 検定